

# 中信高校山岳部かわらばん

編集責任者 大西 浩

池田工業高等学校

## 松本県ヶ丘高校山岳部雪山歩き Part3(その3)

### ～雪の金松寺山・天狗岩・大明神山をぐるっと一回り～ 松田大記

コースは此处から東に向きを変える。最初のうちは相変わらず残雪が多く踏み抜きで大変だった。地図上の顕著な尾根を降ることにしたが、彼方此方に支尾根が派生しており、ルート同定に神経を使う。降って行くと尾根脇にはハッキリとした溝状の道型が残っていた。それはおそらく、50年以上の昔までは、里山から薪炭や伐採木などを引き出すのに使った山作業道(木馬道)の名残で、小生の生まれ育った山麓集落では”あらし”と呼んでいたものと同じと推測した。所々藪になってはいるがその昔は可成りよく人が入っていた事が判る。1747m 三角点から下は急坂で、オマケにキノコの止め山である。無断入山罰金50万円の木札が下がっていると共に、これでもかと云うほど赤い万力テープが張り巡らされている。雪も殆ど無くなり、先ほどの道型以外にもキノコ取りの踏み跡が可成りハッキリしている。此处まで下れば怪我をしたり道迷いや滑落でもしない限り、明るいうちに里まで下れる目安は付いた。あとは呉々も気を付けるよう注意を繰り返しながら降った。

今回のコース上には四カ所の三角点があるのだが、最後の895.5mが確認出来ただけで他は全て雪の下であった。その895.5mを午後3時35分に確認後、残りの岩混じりの急坂を慎重に降り、3時50分車道に降り立った。送電塔脇から再び作業道を降り、午後4時少し前に八景山集落と花見(けみ)集落境界の県道上に無事下山が終了した。結局、大明神山から下山までの所要時間は2時間10分程で、無雪期のネット記録より20分程長いだけだった。此处で休憩を取ると歩くのが嫌になるので、そのまま舗装路を進んだ。前日の下見の通り穴沢川までは県道を歩いた。此处から河岸段丘の上の段に上がり、寺屋、田屋の各集落を抜けて大久保集落の金松寺まで戻るのだが、どうせだからと読図をしながら戻るといふ課題を出し挑戦させた。生徒たちと小生ら顧問二人とは一部違う道を選んだもののミスコースも無く無事左廻り周回コースを歩き終えることが出来た。朝の出発地点帰着は午後4時50分少し前で、正味11時間の行動であった。

写真小僧を自負しながら、天候の悪さのため出発時にカメラを持参することを失念した。従って生徒諸君の悪戦苦闘の様子を映像に残せなかったのがかえすがえすも残念であった。早春の雪山は、雪の状態によってその難易度が左右される。当初の計画通り途中一泊で実施したらどうなっていたかを考察してみたい。まず雪の状態が今回のようであったなら、フル装備では金松寺山頂までが限界であったと思われる。とても天狗岩を越えることは出来なかつただろう。一方雪が締まっていて、あまり沈まずに歩けたらどうだっただろうか。おそらく初日は当初の予定通り天狗岩を越えて1800mピーク手前の平坦鞍部まで進めたと思われる。しかしその後の下山路に可成り陰悪な箇所があり、とてもフル装備で降ることが難しく、事故を起こすか想定以上の時間を要するかのどちらかだったと判断出来る。結果論であるが、登山口前泊のサブ行動は妥当であったと思われる。それにしても男子高校生の体力は凄い。雪の上を歩く経験を何回かさせてある事

と、6人交代とは云え、あの重雪のラッセルをあれだけの長時間こなしたのには感心した。ロートル集団だったらよほどの人数でもない限り金松寺山頂までも危うい位で、天狗岩頂上はまず届かなかっただろう。ワカンやスノーシューを持参したという前提にも触れてみよう。今回の雪の状態だと、登りや平坦路の一部は別として、下りはワカンでは確実に踏み抜いたと推測できる。前途したようにワカンで腐れ雪を踏み抜くと壺足より遙かに始末が悪い。スノーシューは経験が少ないので何とも云えないが、下山路には雪の無い部分は何箇所か有ったので、必然的に脱着の必要があり、それにかかなりの時間を要したと思われる。

## 洞井孝雄著「安心登山の技法」(東京新聞刊)

我が信高山岳会の創設者勝野順さんを通じて僕が「ホライ」さんを知ったのは、長野県高校生訪中登山交流会や経ヶ岳の登山道の開拓作業をしていたころだから、もう今から20年以上前のことだ。会の山行のたびに報告を出すことを義務づけ、それをまとめては毎月会報「縦の木」を発行、年に一回は「ごんぎつね」という年報もチャンチャンと出している「半田ファミリー山の会」という会がある。ホライさんは、その山岳会の主宰者であるということだった。僕にとってのカリスマの勝野さんから、これを読んで見ると渡された「縦の木」と「ごんぎつね」。それは、まだ山登りとしては未熟者だった僕は、これによって山の記録ということの意味を知ったのだった。それはかわらばんをこうして出し続けている今の僕の原点だったのかもしれない。

そのホライさんが標記の本を上梓された。これは極めて質の高い登山の書である。今から10年ほど前に2年間「岳人」に掲載していたものに手を加えた第1部と2009年から月に一回「中日新聞文化面」に連載した記事をまとめた第2部を、一冊の本として編んだものである。「安全登山」ではなく「安心登山」というのは、技術論よりも、多くの人たちが心配しないで山に入ってもらうために必要なこと、登山と自然、それを享受しようとする人間とのかかわり方に重きをおいて付けたネーミングだそう。その中身はまさにホライさんの面目躍如、最近しばらくお会いしていないが、久しぶりに辛口の喝を入れられた感じが小気味よかった。「安心登山」をしたい人必読の書だ。

## 編集子のひとごと

3回シリーズでお伝えした縣陵山岳部の雪山歩き。松田さんの記述は決して誇張ではないと思う。標題には「ぐるっと一回り」と一口で書かれているものの、実働11時間の雪中行動。ラッセルあり、雪の踏み抜きありと写真小僧自慢の写真こそないものの、その内容の濃さに思わず一気に読み切ってしまった。小生も冬(1月)の金松寺山に行ったことがある(かわらばんNo.340/2010/02/01参照)が、その時は深雪に悩まされ、金松寺山で断念、天狗岩までは行けなかった。まあ、この時は縣陵山岳部のような強い意思をもっての登山でもなかったのだが、山頂直下では猛烈なラッセルを強いられて、ワカンを持参しなかったことを後悔したものだった。道具も時と場合によるものだ。それにしても縣陵山岳部の生徒たちの強さ(言うまでもないが、単に大会に強いなんていうことではない)には脱帽、参った、降参です。で、縣陵山岳部はこのあと3月末に、もう一発とんでもない山行をしでかしてくれたことを、松田さんから聞いた。その報告も近々かわらばんで紹介しますので、お楽しみに。恐るべし、縣陵山岳部である。(大西 記)